広告特集 企画・制作 朝日新聞社メディアビジネス局

浅田飴 130周年 特別企画

「せき・こえ・のどに浅田飴」永六輔の声が伝えた本物の価値と心意気

永六輔さんといえば「せき・こえ・のどに浅田飴」のフレーズが真っ先に浮かぶほど、このCMは広く認知されていました。永さんは明治時代から続く浅田飴の企業姿勢にも興味を持ち、CMタレント以上の関わりをもっていたそうです。惜しまれつつ昨年7月に亡くなった永六輔さんを偲び、永さんの次女でフリーアナウンサーの永麻理さんと、孫で俳優の育之介さんの対談とともに、浅田飴130年の歴史を振り返ってみました。

フリーアナウンサー 永 麻理さん

えい・まり／永六輔さんの次女。慶應義塾大学卒業後、フジテレビアナウンサーとなり2年間のニューヨーク駐在を含む報道・情報番組で活躍後、現在はフリー。長男は育之介。次男・拓実は「大道言 祖父・永六輔の今を生きる36の言葉」（小学館）を出版。

自分の言葉でわかりやすくクスッと笑わせて真実を

CM出演もコピーも浅田飴との絆深く

―永六輔さんは、1970年から約30年間も浅田飴の広告に携わられました。ご家族として思い出はありますか。

永麻理（以下、麻理） 父は家では全く仕事の話をしない人でした。テレビや周囲の反応を見て、どうやらうちの父親は世間に知られているらしい、とわかってきた小学生の頃、浅田飴のCMが放送され、あの父の独特の声とフレーズが世の中に広まったんです。学校で友達から「浅田飴！」と言われたりして（笑）。

育之介 僕の世代になると、母とはまた違って、友達の親御さんに「おじいさんは、浅田飴の永さんなんだね」と言われることがあっても、よくわかっていなかったです。幼い頃から家族でラジオは聞いていましたが、どこの家のおじいちゃんも立候補すればラジオに出られるんだろうというくらいの認識で（笑）。ただ、祖父の家に行くというのがなぜかなられるのが楽しみでした。それが浅田飴で、祖父との関わりが深いことを改めてしっかりと理解したのは、昨年亡くなってニュース映像を見てからです。祖父が大事にやってきた仕事のうえのだと知りました。

麻理 実家にはいつも浅田飴がありました。昔のCM映像を見ると、あの立て板に水の早口を懐かしく思い出します。CM出演のきっかけは、浅田飴創業者の二族で「音楽之友」を創刊された音楽評論家の堀内敬三さんとの縁だったと聞いています。父が若い頃、音楽関係の取材にご協力くださって、とてもよくしていただいたそうです。父の「生きているということは誰かに借りを作ること、生きていくということは、その借りを返してゆくこと」という言葉通り、恩義に報いたいという思いもあったのでしょう。浅田飴のCMに出ているから他の企業のCMに出ないなど、自分にとって筋の通らないことはしない方針でした。

照れ屋で無口な素顔 卓越した伝える技術

―テレビの草創期に活躍され、昭和の大ヒット曲の作詞、ベストセラーの執筆、そしてラジオ番組と偉大な業績を残されています。

麻理 言葉に対する感覚が鋭く、誰にでもわかる平易な言葉を選び、それをスパッと人の心に届く形に組み合わせるのが本当にうまかったと思います。また、世の中に何か物申したいときでも、それを必ず笑いの中にまぶして表現するんです。長く続けた浅田飴の雑誌広告のコピーもそうですが、人をクスッと笑わせることを常に考え続けていたと思います。

育之介 僕は自分の祖父がどれだけ影響力があったか、自分には理解できていないままこになって今頃重圧を感じています。読めば読むほど面白くこの人にはかなわないなあ！……。

麻理 父はとても照れ屋だったんです。私も父が外で活動しているのを見たり読んだりしているうちに、すごいなあ、と思うようになったんです。

永六輔さんの「声」がよみがえる！ 秘蔵音声がラジオCMで復活！

テレビ・ラジオCM出演当時の永六輔さんの音声を使用したラジオCMが、9月6日（水）の「浅田飴の日」※から、TBSラジオにて放送されます。

当時のメディアでは未公開の秘蔵のナレーションなど、永六輔さんの貴重な「声」が復活します。CMには永麻理さんもナレーションで出演し、なんと“初”の親子での共演という形になりました。

また、永六輔さんと一緒にラジオ番組に出演していたTBSの外山惠理アナウンサーもナレーションで出演。当時を彷彿させる二人のかけ合いがとても心地よく、リスナーの皆さまに懐かしく聴いていただけることでしょう。

※浅田飴の日：2016年、一般社団法人日本記念日協会により登録認定。

祖父の声を聞いた人々の心に響く発信をしたい

俳優 育之介さん

いくのすけ／1993年東京生まれ。幼少期より芸能を志し、地道な芝居修行を経て活動を開始。祖父である永六輔さんとは、TBSラジオ「誰かとどこかで」、読売テレビ「遠くへ行きたい」で共演し、話題を呼んだ。今後は祖父と同じようなマルチな活躍が期待される。

―ラジオのリスナーにもよくはがきを出されていたそうですね。

育之介 お別れの会をしたときに、かつて祖父から送られたという1枚のはがきを大事そうに持って泣いている人もいました。永六輔のはがきってそんなに価値があるんだ！と衝撃でした。その会で祖父宛てに書いてもらった700枚近くのはがきのほとんどに僕が返事を書いたんです。それまでメールの方が簡単なのにと思っていたのですが、この経験で紙が1枚送られてくることの味わいはがきでなければ伝わらないコミュニケーションがあると気づきました。

世代を超えて心に響き受け継がれる声の力

麻理 私がアナウンサーを志したのも、父が人に対してわかりやすく話しているのをいいなあと思ったことが根底にあると思います。父はラジオの電波が届く先に出かけ、そこで見聞きしてきたことを、自分の声で、言葉で伝えることを実行してきました。放送に関わる人間はスタジオでものを考えていてはいけない、と。なかなかできることではないですが、父が大事にしてきたように広い知見からくる言葉を持ちたいです。

育之介 以前、僕が戦争もので特攻隊員の役を演じる時に、祖父に当時の社会情勢や若者の気持ちについて聞きに行きました。当時もう具合が悪く、少し話すと疲れてしまう状態だったのに、力を振り絞ってしっかりと目を合わせて話してくれた。その貴重な肉声は録音して、大事な宝の一つになっています。

麻理 最近父の知り合いが育之介の声を聞いて「永六輔さんに似ているね！」と言ってくれて、うれしく思いました。父のかつての声を懐かしく思い、忘れずにいてくださることはありがたいですね。

育之介 僕はもっと祖父のことを知り、好きになりたいという思いで、祖父の業績をまとめています。過去の祖父の声をラジオの音源で聞くと、遠い記憶が刺激されるのか、ゾクッとするんです。祖父の声が新しいことをしゃべることはもう二度とありませんが、少し似ているかもしれない僕の声で同じようなことができたら、祖父の声をいとおしく思ってくれている人たちに何か感じてくれている人たちと思っています。与えられたものだけでなく僕の選んだ言葉で語りたい、例えば脚本を書いたり、ラジオでしゃべったり、表現していけたらと思っています。

麻理 テレビが生まれて、時代の流れの中で放送をはじめ幅広い分野で活躍していた父が残したものをもう一度見直して、二本筋の通った生き方を語り継ぐ大切さを感じています。

永六輔さん唯一のテレビCM「せき・こえ・のどに浅田飴」

永六輔さんは1970年に第1回目の浅田飴テレビCMに出演。その後、黒柳徹子さんから受け継ぎ、1983年にも出演。3回目の出演となった1996年に出版された「せきこえのどに六輔」（飛鳥新社）中には、『話の特集』発行人の矢崎泰久さん、イラストレーターの山下勇三さんとの鼎談で、「『浅田飴の宣伝をしているのに、他の宣伝をしちゃ失礼だと思うんだ』と語っています。

浅田飴 130年の歩み

漢方医 浅田宗伯

1815年、代々医師の家庭に生まれ、漢方医学を学ぶ。徳川将軍家の典医を務め、幕末に活躍した。明治時代には宮内省侍医。医学だけでなく文章や書にも優れ、門人も多数。浅田飴のルーツとなる処方を考案した。

- **1887 明治20年** 堀内伊三郎、東京市神田区富山町で、浅田宗伯処方の「御薬さらし水飴」を創製発売。
- **1889 明治22年** 東京市神田区鍋町に店舗を設ける。初代堀内伊太郎「御薬さらし水飴」を「浅田飴」と改称。広告として初めて引札（今でいうチラシ）を使う。「良薬にして口に甘し」「すきはらにめし、たんせきに浅田飴」のキャッチフレーズも考案。
- **1893 明治26年** 東京市神田区銀冶町（現所在地）に店舗および工場を移転。
- **1897 明治30年** 固形浅田飴（キャラメル型）創製発売。
- **1915 大正4年** 固形浅田飴（甚石型）創製発売。
- **1926 大正15年** 株式会社堀内伊太郎商店を設立し、2代目堀内伊太郎が社長に就任。
- **1947 昭和22年** 各種一般用医薬品の製造を開始。
- **1952 昭和27年** 固形浅田飴クール発売。缶を現行の日輪デザインに一新。
- **1960 昭和35年** 3代目堀内伊太郎 社長に就任。
- **1962 昭和37年** 第1回目の永六輔テレビCM放送。
- **1970 昭和45年** 堀内恵美子 社長に就任。
- **1972 昭和47年** ダイエット甘味料の発売を開始。
- **1973 昭和48年** 第2回目の永六輔テレビCM放送。
- **1983 昭和58年** 固形浅田飴パッション発売。固形浅田飴小包装製品発売。
- **1986 昭和61年** 堀内滋彦 社長に就任。
- **1991 平成3年** 第3回目の永六輔テレビCM放送。
- **1994 平成6年** 株式会社浅田飴に社名変更。
- **1996 平成8年** 堀内邦彦 社長に就任。シュガーレス固形浅田飴発売。
- **2003 平成15年** 浅田飴ガードドロップ発売。指定医薬部外品
- **2008 平成20年** 乗り物酔い薬 トラベロップQQ発売。
- **2015 平成27年** 創業130周年。
- **2017 平成29年**

本物志向の永六輔さんに認められた伝統

株式会社浅田飴 取締役会長 堀内恵美子

私が社長を務めていた1983年、永六輔さんに2度目のCM出演をしていただきました。私の夫であり前社長だった3代目堀内伊太郎との「10年くらい経ったらまたCMに出ましょう」という約束を果たしてくれたのです。収録にはいつも立ち会いましたが、あらかじめ作ってあった絵コンテに永さんは色々と自分のアイデアをお出しになり、いつも永さん色の楽しいオリジナルになっていました。プライベートでもよく食事をご一緒し、日本の歴史や伝統、いろいろな地域の話など、本当に博識で話が弾み、尊敬の念を深くしておりました。

当社は、夫の曾祖父である堀内伊三郎が、漢方医の浅田宗伯先生から処方をいただき、「御薬さらし水飴」を発売したことを創業の起源としています。また、初代堀内伊太郎は「浅田飴」と命名し、当時の画期的な広告「引札」も作るなど発想力のある人でした。永さんはそうした当社の歴史にも興味を持っていたのでしょう。古い伝統や「本物」を尊重する永さんだからこそ、長く当社のCMに携わっていただいたのだと思います。昨年訃報を聞き、さまざまな思い出がよみがえりました。長いお付き合いのなか、ご著書で何度も浅田飴を取り上げていただいたことは、私への手紙のように思っています。（談）

130年の信頼を基盤に、時代のニーズにあった進化を続ける

株式会社浅田飴 代表取締役社長 堀内邦彦

「浅田飴は医薬品です」――永六輔さんが「せき・こえ・のどに浅田飴」とともに、CMのナレーションや雑誌広告で入れていたフレーズです。これは、浅田飴が嗜好品（しこうひん）の「のどあめ」とは異なること、そして浅田宗伯先生の漢方処方を守り、昔から品質を厳格に管理していることも表しています。なめやすさと味については、お客様の要望を取り入れながら改良を繰り返し、口のなかでゆっくり溶ける「ソフト糖衣」という独自の技術も開発しました。130年にわたって事業が存続した背景には、こうした姿勢にお客様の信頼をいただけたこと、そして永さんによって浸透したブランドイメージも大きいと思います。

今後も老舗として築いた信頼を守りながら、保守的にならず開発に力を入れ、新商品を生み出しやすい企業体質にしていくことが大切です。具体的には、のど関連と甘味料の二本柱に加え、子ども関連の商品を拡充していきます。また、海外へのアプローチも比重を高める予定です。

明治時代のキャッチコピー「良薬にして口に甘し」は今も開発の軸です。薬が苦手な方でも服用しやすい薬を提供することが当社の使命。セルフメディケーションが必要不可欠な時代に、家庭薬に期待される役割に応え、社会に貢献していきます。（談）

株式会社浅田飴
www.asadaame.co.jp

©Fujiko-Pro, Shogakukan, TV-Asahi, Shin-ei, and ADK